

振り返りカードの分析による研修の成果検証

中谷 仁美

Outcome inspection of training by an analysis on a reflection cards

NAKAYA Hitomi

(Received August 3, 2020)

キーワード：成果検証、テキスト計量分析、研修の生産性

はじめに

研修講座実施後の報告書において、その成果は「実施回数」や「受講者数」などのOutput（結果）や、受講後の自由記述アンケートの多数意見で示される。また、任意の研修講座は評価対象としての試験等を実施しないため、受講者にもたらされるOutcome（成果）を測定しない場合が多い。よって受講者の変容と研修の趣旨との整合性の検証や、受講者のニーズの把握といった、研修の生産性向上に資するデータを得ることができていないと考える。

そこで本稿では、振り返りカードを利用したテキスト計量分析をすることで、受講者の変容及びニーズについて考察する。その考察から生産性向上に資する研修の在り方や、研修講座実施により受講者一人一人に応じた学びの深まりが起る条件、成果を測定できる評価方法、表出できる振り返りカードの要件を探る。

1. 分析対象と分析方法

山口大学教育学部附属教育実践総合センターでは、「現代的教育課題セミナー」として、学生を対象とした任意の研修講座を開催している。2019年度は「へき地・複式教育」「小中一貫教育」に関する県主催の教職員対象研究会への参加を促進した。加えて、同年度新企画として「シリーズHow to教材研究」を実施した。本稿では「シリーズHow to教材研究」を分析対象として行った研究について述べる。

1-1 分析対象となる研修講座の概要

教育学部学生を対象として、表1のような教材研究に関する研修講座を行った。

表1 「シリーズHow to教材研究」開催内容一覧

回	期日	内容・講師	総受講者数（人）	属性別受講者数（人）
1	2020年1月26日（日）	国語科 ・他大学准教授 （元公立小学校教員）	18	1年生：3 2年生：3 3年生：8 4年生：4
2	2020年2月1日（土）	特別の教科 道徳 ・本学附属学校園教諭	31	1年生：6 2年生：3 3年生：13 4年生：9

この研修講座の趣旨は、以下のとおりである。

【研修講座の趣旨】

主体的・対話的で深い学びを実現するための教科における見方・考え方や、教材研究の仕方について、講義・演習等によって学ぶことで、教員に求められる資質能力の向上や授業づくりに対する意識の高揚を図る。

本研修で実施した振り返りカードのサンプルを図1に示す。

2019 教育実践総合センター「教職・現代的教育課題セミナー」
シリーズ How to 教材研究？（第1回）2020.1.25
Reflection シート

1 学年

2 研修開始前
本日の研修への意気込みや期待すること等を、「教材研究」という語句を使って、一文で記述してください。

教材研究に対する理解度 5 4 3 2 1

3 研修終了後
本日の研修で学んだことや感想等を、「教材研究」という語句を使って、一文で記述してください。

教材研究に対する理解度 5 4 3 2 1

図1 振り返りカードサンプル

まず、受講者の属性として学年を記入する。次に、研修前に研修への期待等について「教材研究」という語句を使った一文で記述する。同様に、研修後にも感想等について「教材研究」という語句を使った一文で記述する。最後に、受講者の教材研究に対する理解度を5段階で自己評価する。このような振り返りカードを研修前後の5分間程度で記述する形で行った。回収率は100%であった。

1-2 分析方法

前述の表1の受講者が図1の振り返りカードに記述した内容を対象に、「kh_coder2.00 f¹」を用いてテキスト計量分析を行った。

2. 分析結果とそこから読み取れる成果

前章で述べた内容及び方法で分析した結果について述べる。まず、研修前後の頻出語句を分析・比較することで、受講者の意識がどのように変容したかを見る。次に、受講者の属性(学年)ごとの頻出語句を対応分析により明らかにし、その違いについて検討する。

その後、これらの分析結果を解釈していくこととする。

2-1 頻出語句分析結果

第1回及び第2回の研修実施前後の頻出語句をグラフにしたものが図2から図5である。

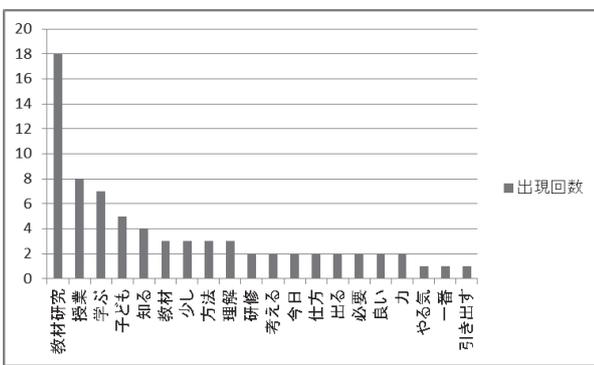


図2 第1回研修実施前頻出語句

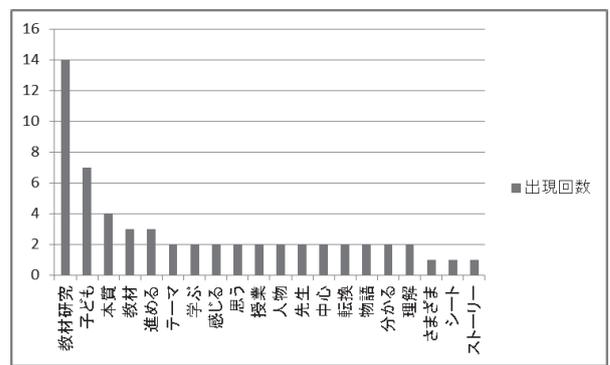


図3 第1回研修実施後頻出語句

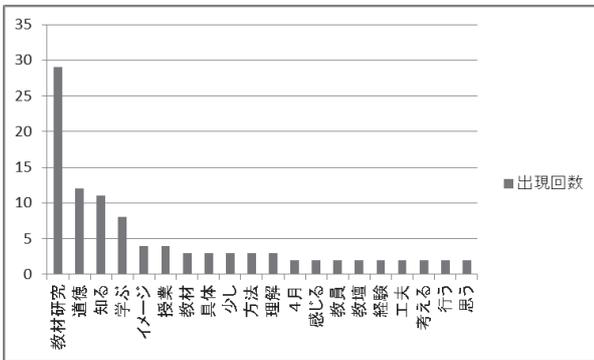


図4 第2回研修実施前頻出語句

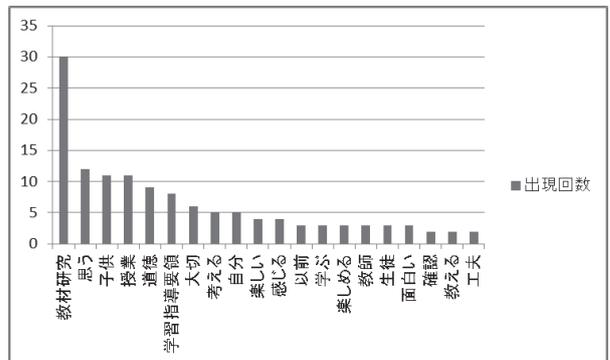


図5 第2回研修実施後頻出語句

記述の条件として設定した「教材研究」という語句について多く出現する語句は、研修前後を問わず「授業」「子供」であることが分かる。これらの語句は、「子どもに授業をするにあたって、どこまで教材研究を深めていくべきか、どのように行えばよいかを知りたい」といった文脈で用いられていた。また、講義中に講師が繰り返し使用していた「本質」「テーマ」「学習指導要領」等の語句が、研修後に出現している。

特に第2回研修後には、「楽しい」「楽しめる」「面白い」という語句が出現していることが、図5から分かる。その他、研修全体を通して、実施前には見られない「先生」「教師」が研修後に出現する傾向が見られる。これらの語句は「先生のストーリー理解の重要性を感じ、さまざまな角度から教材を研究したいなと感じた」「教師の工夫一つで授業が決まるので、子供のためにも教材研究が大切になってくる」といった文脈で用いられている。

本項では、頻出語句の分析から受講者全体の認識の傾向を捉えた。では、受講者の属性別では、どのような違いが見られるのだろうか。

2-2 属性別対応分析結果

次に、受講者の属性（学年）による頻出語句を比較するために、対応分析を行った結果が図6から図9である。図中の①から④の数字は、受講者の学年を表している。

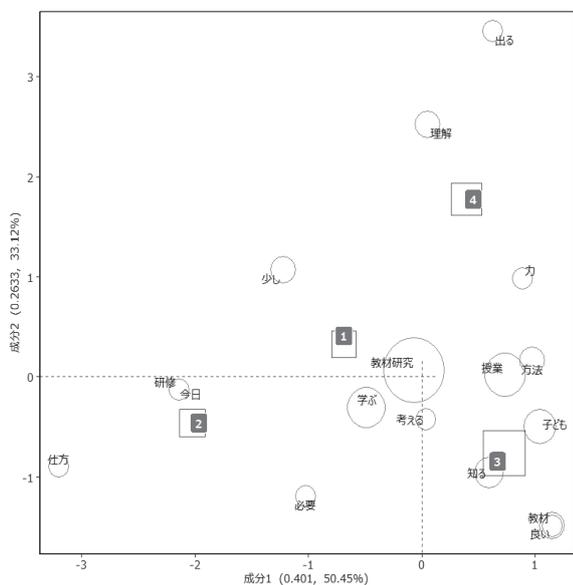


図6 第1回研修実施前対応分析

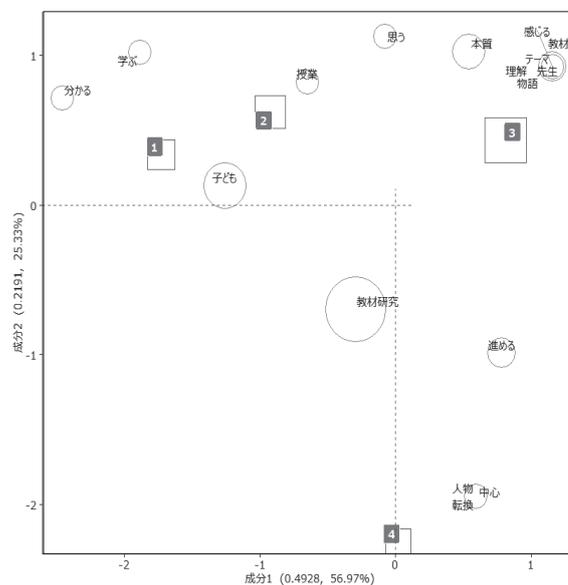


図7 第1回研修実施後対応分析

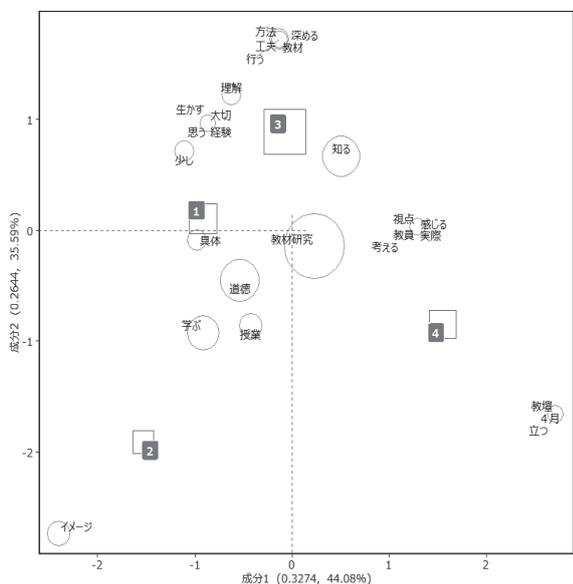


図8 第2回研修実施前対応分析

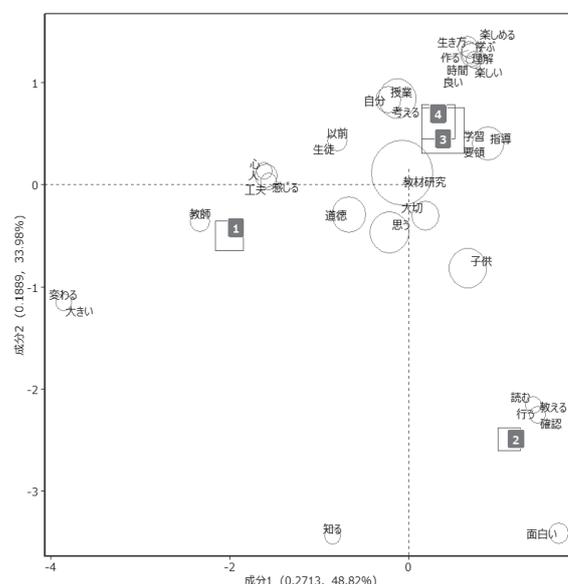


図9 第2回研修実施後対応分析

研修前、特に3年生には「方法」「授業」「教材」という語句が特徴語として挙げられる。また、研修後、特に3・4年生には「本質」「テーマ」（第1回）「学習指導要領」（第2回）といった講義中に講師が繰り返し使用していた語句が出現していることが分かる。

2-3 分析結果から読み取れる成果

2-2及び2-3において、研修前後の頻出語句及び受講者の属性別対応分析を行った結果について述べた。本項ではこれらの結果から読み取れる本研修講座「シリーズHow to教材研究」の成果について述べる。ポイントは、1) 教師への憧れと向上心 2) 講師や受講内容の影響 3) 学年による切実感の差 の3点である。

1) 教師への憧れと向上心

研修前後を問わず「授業」「子供」が頻出語句であったこと、実施前には見られない「先生」「教師」が研修後に出現する傾向が見られたことについて2-1で述べた。土日開催の本研修に希望して参加した受講者は、その時点で意欲的であり、そのことが「子供」に「授業」を行う存在である教師への憧れとして振り返りカードの記述に現れたと考えられる。同時に研修後には教材研究の重要性を「教師」「先生」と結びつけるような記述が出現することから、研修を通して児童生徒に及ぼす教師の授業力、つまり「教員に求められる資質能力」に関する向上心が高まったと解釈できる。

2) 講師や受講内容の影響

講義中に講師が繰り返し使用した語句が研修後に出現することは、受講者が講義内容を反芻していることを意味する。第1回研修では、国語科で物語文教材を指導するにあたり教材文の「本質」や「テーマ」を論理的に分析することについて演習を通して学んだ。第2回研修では、講師自身の実践事例を模擬授業で示す形で行った。児童生徒の立場で「特別の教科 道徳」の授業を受けながら、受講者たちは童心に返ったように笑ったりしゃべったりしており、演習を楽しんでいる様子が見られた。図5において「楽しい」「面白い」等の語句が研修後に出現していることの要因となったと考えられる。また、教師の個人的な経験に偏った道徳教育を戒め、「学習指導要領」を熟読することの重要性を説くだけでなく、授業づくりに際しての活用の仕方示された。これらの講義内容が受講者の印象に深く残っていたことが、この分析結果から明らかになった。これは「教科における見方・考え方や、教材研究の仕方」について、受講者の印象に強く残る講義・演習を実施する講師の力量に依るものといえよう。

3) 学年による切実感の差

2-2で述べたように、対応分析の結果から研修前の3年生には「方法」「授業」「教材」という語句が特徴語として挙げられることや、研修後の3・4年生には「本質」「テーマ」(第1回)、「学習指導要領」(第2回)といった講義中に講師が繰り返し使用していた語句が出現していることが分かった。

研修前の記述を見ると、これらの語句は例えば「4月から現場に出るにあたり、教材研究が大切なのはわかるけれど、どのようにやるべきなの?という不安を少しでも解消したい」(4年生)や「子どもに授業をするにあたって、どこまで教材研究を深めていくべきか、どのように行えばよいかを知りたい」(3年生)といった文脈で用いられていたことから、学生の教材研究を学ぶことに対する「切実感」があると言える。一方、図6、図8の1・2年生には特徴語は見られず、記述内容は「先生になったら必ずしなければならぬ教材研究というイメージだが、何をするんだろう」や「教材研究に関して、まったく知識がないので少しでも理解できるようになりたい」のように関心はあるものの「切実感」があるとは言えないものであった。以上の対応分析の結果と実際の記述内容の文脈から、1・2年生に比べて3・4年生は、研修に参加するにあたって教材研究をもとにした「授業づくり」に対する「切実感」をもって臨んでいると言える。

研修後には、「すぐにでも学習指導要領を開いて教材研究がしたい」(3年生)、「学習指導要領を確認し方向性を守ったうえで授業を面白おかしく考え作りたい」(3年生)のような記述が見られ、講義・演習の影響を受けて「授業づくり」に対する意識が高揚した姿であると考えられる。

以上、研修前後の頻出語句及び受講者の属性別対応分析を行った結果から読み取れる本研修講座の成果は、

- 1) 教師への憧れと向上心が高まったこと
 - 2) 指導力のある講師や受講内容の影響を受けていること
 - 3) 切実感をもって研修に臨む3・4年生は授業づくりへの意識も高揚していること
- の3点にまとめることができるだろう。

3. 研修の生産性向上とは何か

前章の分析を踏まえて、本研修講座の生産性について考える。そもそも生産性の高い研修とはどのようなものだろうか。一般的に生産性は、図10のように、産出成果と投入資源の比で表される。（伊賀泰代, 2016）

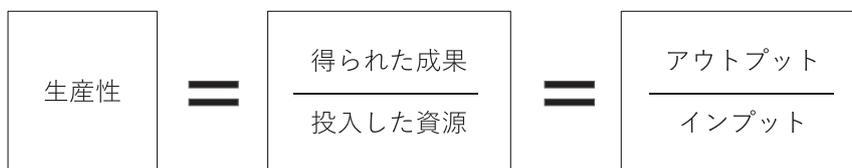


図10 生産性の定義（伊賀泰代（2016）『生産性』から引用）

生産性を本研修講座に当てはめると、投入資源は研修実施に係る時間や諸経費（Input）であり、得られた成果は受講者数（Output）、受講者の意識や理解度（Outcome）となる。投入資源については、受講者個人やその属性にかかわらず平等であると考え。一方、得られた成果のうち受講者数（Output）は、表1に示した通りで、受講者の意識については、前章で述べた通り特に3・4年生に高揚が見られた。生産性の高低については、今年度初めて企画した研修講座であることから、過去のデータとの比較によって明らかにすることは困難である。

そこで、本研修講座実施前後の受講者の理解度（Outcome）の変容から、得られた成果を分析することを試みる。

3-1 「教材研究に対する理解度」の比較による分析

本研修講座における「授業づくりに対する意識」を、図1で示したように、受講者の「教材研究に対する理解度」として5段階で自己評価した結果を研修前後で比較したものが図11、図12である。受講者全体の平均値で比較したところ、第1回、第2回いずれも研修後の理解度が増していることが分かる。つまり、研修を受けることによって「授業づくりに必要な教材研究についての理解が高まった」と認識している受講者が多いことは、本研修講座の趣旨にある「授業づくりに対する意識の高揚を図る」ことが達成されたと言えるだろう。

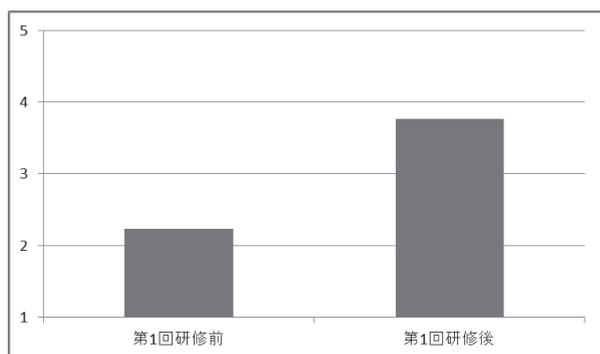


図11 「教材研究に対する理解度」の比較
(第1回)

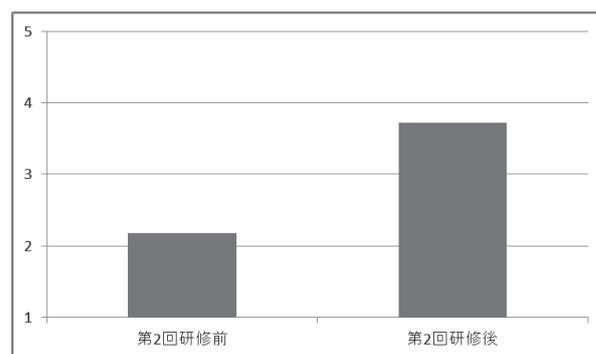


図12 「教材研究に対する理解度」の比較
(第2回)

図11、図12は、全学年を平均したもののだが、学年別の「教材研究に対する理解度」はどのようなになっているだろうか。学年別平均値で研修前後を比較したものが、図13、図14である。

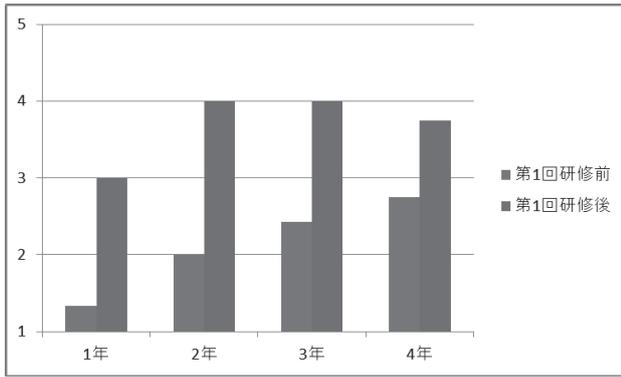


図 1 3 「教材研究に対する理解度」の学年別比較 (第1回)

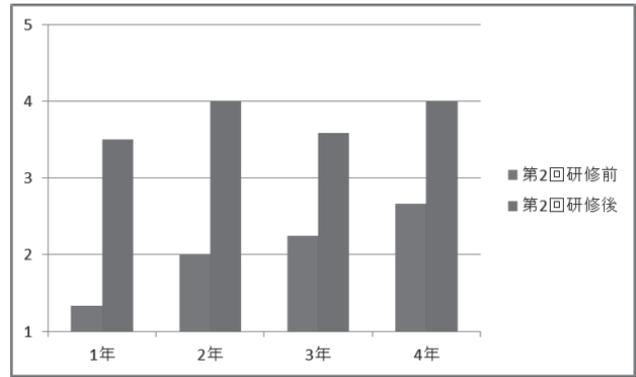


図 1 4 「教材研究に対する理解度」の学年別比較 (第2回)

図 1 3、図 1 4 を見ると、研修前の「教材研究に対する理解度」は、学年を追うごとに高くなっていることが分かる。さらに学年別に研修前後の理解度の上昇率を比較するために、実施後の理解度が実施前より何倍になっているかをグラフで表したものが図 1 5、図 1 6 である。

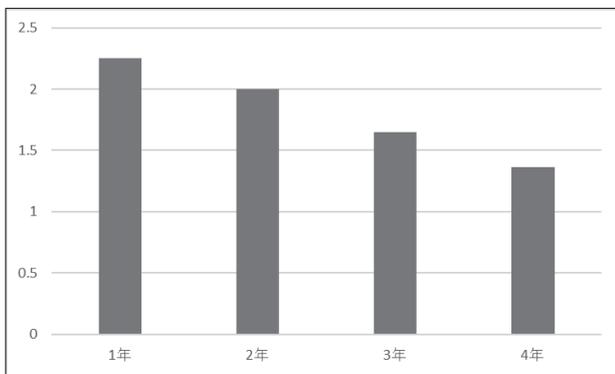


図 1 5 「教材研究に対する理解度」の学年別上昇率 (第1回)

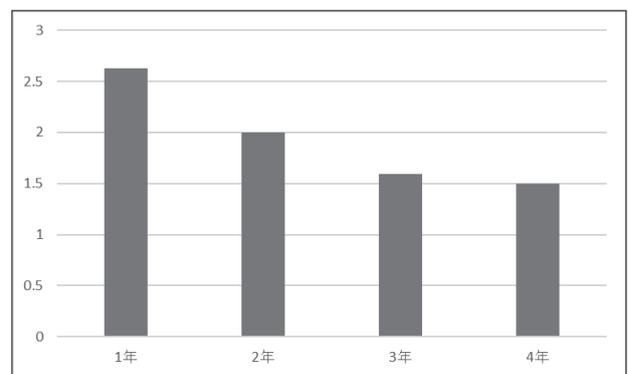


図 1 6 「教材研究に対する理解度」の学年別上昇率 (第2回)

図 1 5、図 1 6 から、研修前後の理解度の上昇率は、学年が低いほど高いことが分かる。つまり、理解度の伸びしろの大きい 1・2 年生は 3・4 年生に比べて研修によって得られた成果が大きいことになる。

受講者数という結果 (Output) だけで見ると、表 1 の通り 1・2 年生と 3・4 年生の比は約 1 : 2 で、より多くが受講した 3・4 年生の生産性が高いということになるが、図 1 5、図 1 6 に見られる研修前後の「教材研究に対する理解度」上昇率の大きさを考慮に入れると、1・2 年生の生産性も高いと言え、これは受講者後の資質能力の向上や意識の高揚を促す価値があると考えられる。

よって、任意参加の本研修講座の場合、受講対象者を設定する際には、大学のカリキュラムや学生の発達段階にしばられず対象者の属性を広げることが、その生産性向上には有効な視点であると結論付けられる。

3-2 研修効果検証の課題と展望

研修講座の生産性を可視化し、次の企画に反映させる課題と展望についてまとめる。

本研修講座においては、講義・演習を通して、教員に求められる資質能力の向上や授業づくりに対する意識の高揚を図ることを目的として実施した。その成果を、受講者の属性や目的に関するキーワードを用いた記述により検証する方法で行った。結果、受講者の意識の変容や理解度について把握することができた。

この検証方法では、受講者が振り返りシートを記述する場の確保が不可欠である。また、書かせた記述をデータ化し分析する作業が簡便である必要もある。今回の研修講座では、研修前後の 5 分間程度で紙媒体に記述する形で行った。研修会場で時間と場を確保することで回収率 100% となったが、紙媒体への記述であるため分析のために後日電子データ化する作業が発生した。仮に、後日電子媒体で振り返りシートを提出さ

せる形であれば、回収及び分析の効率は上がるが、任意参加の研修であり提出を強制しなければ回収率は大きく落ち込むことが予想される。回収率が低ければ信頼性のある分析は困難になる。望ましいのは、研修会場で時間と場を設定してデジタルデータを提出できる仕組みが確立されていることである。

本研修講座は今年度新企画「シリーズHow to教材研究」として実施した。前述した研修成果や生産性向上に有効な視点が次の研修講座に反映され、さらに研修成果が上がっているかどうか検証するには、次年度も研修講座の継続実施が望まれる。

3-3 研修の成果検証に有効な振り返りカードの要件

ここまでの研修成果の検証を通して、研修講座を実施することによって受講者一人一人に応じた学びの深まりが起こる条件、それら効果を測定できる評価方法、表出できる振り返りカードの要件についての一考察を述べる。

まず、研修講座実施により受講者一人一人に応じた学びの深まりを起こすには、受講者本人が、課題に関する研修前後の変容を意識する必要がある。本稿では「教材研究に対する理解度」として図1のようにその変容が受講者本人に可視化できる形で行った。この研修前後の比較により、第3章3-1「『教材研究に対する理解度』の比較による分析」で述べた通り、学年間の差が明らかにすることができた。

次に、研修前後の比較可能かつ客観的なデータを収集することである。本稿で試みた「教材研究に対する理解度」は、受講者の主観による測定であった。第2章2-3「分析結果から読み取れる成果」において述べた通り、「指導力のある講師や受講内容の影響を受けていること」を考えると、受講者自身が「できた気になる」「分かったつもりになる」ことが危惧される。そこで、受講者の主観だけでなく客観的な数値で課題に対する理解度や意欲を測定できる指標の開発が必要ではないだろうか。この指標の開発によって、第1章1-1で示した研修講座の趣旨にある「教員に求められる資質能力」や「授業づくりに対する意識」の向上と受講者の変容とが望ましい相関関係にあるかどうかを検証できるのではないだろうか。

以上、研修前後の変容の可視化及び比較可能かつ客観的なデータの収集という要件を備えた振り返りカードを開発していくことが、今後求められるだろう。

おわりに

本稿では、研修の生産性向上のための分析と考察を試みた。本来、研修は「実施すること」が目的ではなく、実施することによって「受講者に成果・効果をもたらすこと」を目指す。今回の分析と考察から得た研修の生産性向上の視点を活かした講座を次年度も実施することで、目的がより確実に達成されることの重要性を再認識した。今後、成果検証に加えて受講者のニーズや学びの深まりをよりの確に把握し反映させる方途も探っていききたい。

注

1. 樋口耕一が著作権を持つテキスト計量分析のためのフリー・ソフトウェア

参考・引用文献

- 1) 伊賀泰代(2016)：「生産性 マッキンゼーが組織と人材に求め続けるもの」,ダイヤモンド社, p. 31.
- 2) 樋口耕一(2014)：「会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して―」, ナカニシヤ出版.
- 3) 山口大学ホームページ. 最終閲覧2020. 3. 6
- 4) 山口県教育委員会(2019)：「山口県教員育成指標」